

報告

基礎看護学実習の記録における看護専門職としての思考に注目した研究 —リフレクティブサイクルを用いて—

安藤 敬子* 古庄 夏香* 原 百合*
青山 和子** 窪田 恵子*** 小田 正枝***

＜要 旨＞

本研究では、リフレクションの概念に沿った記録用紙を採用し、学生の自己への振り返りがどのようになされているかについて明らかにした。その結果、＜自己への気づき＞として「状況の判断ができていない自分」や「相手の状況を考えずに発言してしまう自分」などがあり、看護専門職者としての価値観を形成する過程で重要であると考えられた。また、学生の実習における経験をリフレクティブジャーナルに記述することで、自己への振り返りが可能になり、それらがクリティカルシンキングのスキルであることから、リフレクティブジャーナルが記録用紙として効果的であることがわかった。

キーワード：基礎看護学実習、看護専門職、リフレクション、クリティカルシンキング、リフレクティブサイクル

I. 緒 言

臨地実習は、看護教育における実践教育の中心として位置づけられ、講義で学んだ看護と実践で学んだ看護とが一致し、実践という体験をとおして看護に対する認識を深めるものである¹⁾。本学の看護学科における基礎看護学実習は「1. 患者の生活上のニーズを判断し、生活行動の援助を学ぶ。2. 実習を通して看護の役割について学ぶ」ことを教育目標²⁾に実施している(注1)。初学者である学生が、看護場面で自分と異なる価値観をもつ対象の存在を知り、対象を理解することや、その中で対象のニーズを明確にすることが目標である。その実践は、看護専門職者としての価値観や信念の形成に大きな影響を与える³⁾経験になる。

学生の思考過程や学習状況は実践や記録で確認されるが、特に記録は、指導教員や病棟指導者が学生とやり取りをすることができ、学習などの状況を知ることができる重要なツールになる。本学の基礎看護学実習でも「日々の記録」を用い、学びや気づきを記録していた。記録内容の多くは、実施したケアに対する反省

や上手くいかなかったことなどの感想であり、具体的な解決方法を導くことができていない状況が記載されていた。これまで学生への学びに有効な記録様式について検討を重ねていたが、今回、実践を通して効果的な学びを可能にすると考えられているリフレクション⁴⁾の概念から、田村(注2)らの作成したリフレクティブジャーナル(以下RJ)の導入を試みた。看護学生にとってリフレクションの実践は、今日のヘルスケアシステムに役立つばかりでなく、看護師が挑戦の気持ちを高め、将来に向けて方向付けされるために必要なスキルを学習する機会になり、看護師の成長に欠くことのできない道筋であると説明されている。これまでリフレクティブジャーナルを用いた研究⁵⁾において、＜自己への気づき＞というスキルを学生が活用・習得することによって、前向きな行動変容が起こり、患者—看護者関係の構築に良い影響を及ぼすことが示唆されている。そこで本学の基礎看護学実習(2)を履修する学生の思考過程を明らかにし、＜自己への気づき＞を明らかにすること、さらに、＜自己への気づき＞ができていないことが、学生の看護専門職としての思考にどのように影響しているのか明らかにするこ

* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科 助手
** 西南女学院大学保健福祉学部看護学科 准教授
*** 西南女学院大学保健福祉学部看護学科 教授

とを目的に研究を行った。

【用語の解釈】

1) リフレクション

リフレクションは、ジョン・デューイのreflective thinking (反省的思考) に由来 (注3) している。ドナルド・ショーンは、「反省的实践 (家)」として更に探求された専門家のもつ能力である⁶⁾とし、「実践 (行為) の経験を振り返るプロセスであり、記述、分析、評価を行う手段である。また、実践から学ぶということはどういうことかを理解するための一つの方法である⁷⁾と定義した。クリス・バルマンやサラ・バーンズは、この思考過程が経験知を重視する看護専門職教育にも重要であり、看護専門職者が行うリフレクションは、実践を反省し、更なる看護実践の検討であると説明している。それらから、リフレクションを用いた考え方は、“何を考えるのか”ということよりも“いかに考えるのか”という価値に立ち戻らせるとも述べられている⁸⁾。

2) リフレクティブサイクル

教育学者のグラハム・ギブズは、リフレクションについての研究「Learning by Doing ;A guide to teaching and learning methods」でリフレクションの過程をリフレクティブサイクル (図1) として説明している⁹⁻¹⁰⁾。リフレクティブサイクルは、

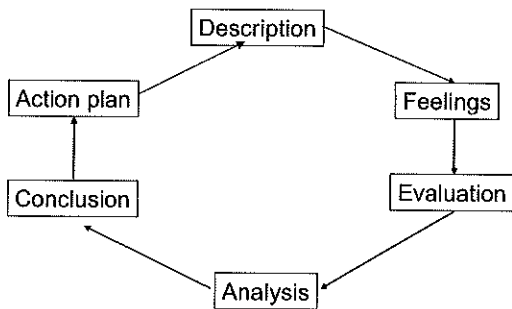


図1 Gibbsのリフレクティブサイクル

表1 リフレクティブサイクルの概念毎の意味

| 概念 | 説明 |
|-------------|---|
| Description | What happened? (起こったことの詳述) |
| Feelings | What were you thinking and feeling? (その時の感情や思い、考えの想起) |
| Evaluation | What was good and bad about the experience? (個・専門家である自己に対峙する) |
| Analysis | What sense can you make of the situation? (吟味) |
| Conclusion | What else could you have done? (選択肢の検討) |
| Action plan | If it arose again, what would you do? (もし同じような状況が起きたら、どうするか? 学びの表現) |

「Description : 記述・描写」、「Feelings : 感覚」、「Evaluation : 評価」、「Analysis : 分析」、「Conclusion : 推論」、「Action plan : アクションプラン」の概念 (表1) で構成される。

3) 自己への気付き

リフレクションに必要なスキルとして<自己への気付き><表現><批判的分析><統合><評価>が明らかになっている¹¹⁾。また、クリティカルシンキングが批判的分析の局面で行う主要な思考活動であり、全てのレベルに不可欠なものとして<自己への気付き>がある¹²⁾と述べられている。自己に気付くとは、信念、価値観、素養、強みや弱みを含む自分の性格を意識することであり、自分自身を知ることである¹³⁾。

II. 研究方法

1. 研究対象：2006年2月26日から3月14日まで実施された基礎看護学実習 (2) を履修した看護学科2年生88名が、実習期間の6日間に書いたRJ522件を対象にした。
2. 研究期間：2006年5月から2007年9月
3. 分析方法：RJの記述内容について質的記述的方法を用いて分析した。

<分析の手順>

①リフレクティブサイクルの概念を元に田村らによって作成された記録用紙を許可を得て使用した (表

表2 実習における記録用紙に記載された質問および指示の内容

1. 本日の実習における看護実践および見学内容の「状況」を教員や指導者に語りかけるように記述してください。あなたが「ハッ」としたり「アレッ!?” “ウーン” “ハテナ?” と思った場面等を記述してください。また、書くときはその状況を全く知らない人が読んでも、まるでその場に居たかのように、そこで何が起こっていたのか、「いつ・だれが・だれに・どこに・何を・どのように」という書くための基本要素を思い出して書いてください。
2. 記述した中で「よかった：二重下線」「よくなかった：波下線」と思ったところだけに下線を引いてください。
3. 記述したこの「状況」の中で、「事実」のところに (一重の) 下線を引いてください。
4. この「状況」を改善するにはどうしたらよいですか。どのような看護実践が望ましいですか? 具体的に記述してください。
5. なぜそのようにすることが望ましいのですか? その根拠となる知識や過去の経験等を示し説明してください。
6. この経験から学んだことを元に、自分の学習計画を記述してください。(今、自分に必要な学びは何か、具体的にどのように行動するのかを記述してください)

2)。②全RJから【用語の解釈】で記述した＜自己への気付き＞が記述されているものを抽出した。③抽出されたRJの内容をリフレクティブサイクルにそって、学生の思考がどのように構築されているのか、質的研究の経験がある研究者らが、知識の統一をはかり分析した。なお、田村による専門的知識の教授を得た。

4. 倫理的配慮

本研究は、西南女学院大学 倫理審査委員会で承認を受けた。研究者らによって研究の主旨を口頭と文書にて説明し、研究参加同意書にサインすることで同意の意思を確認した。同意を得るにあたり、研究への不参加が成績に関係しないことや、いつでも研究参加の中止ができることを説明した。また個人が特定できないように匿名性を保持し、プライバシーへの配慮を行うことを説明、実施した。

Ⅲ. 結果

1. 学生の記録と指導教員によるコメントの実状

522件のRJのなかで、＜自己への気付き＞が記述されているデータ、17件を抽出した。＜自己への気付き＞のスキルが用いられていた内容、それによって展開されたリフレクティブサイクルの状況について以下にまとめる(表3)。

1) 自己への気づきとリフレクティブサイクルについて

No.1では、「焦りを強く感じるため、ひとつのことに夢中になりすぎる」ことに気づいた。相手の立場になって考えられないことや、自分自身のケアや観察に自信がもてないことが記述されているが、具体的な解決策には至っていなかった。

No.2では、「他者の本質的な部分を知ることができなかった自分」に気づいた。看護師の対象に向かう姿勢について考える機会になった場面での気付きであった。身体的、心理社会的な側面で多岐にわたる不安や悩みをもつ対象の発言について理解しようとしていた。コメントによって、共感と同情の違いに気付いたが、その後どのように解決するのか具体的な方法は記述されていなかった。

No.3では、「他者に気遣う行動がとれていなかった自分」に気がついていた。学内演習とは異なる、状況の重篤さや対象への気遣いの必要性を理解し、甘えていた自分を振り返った。自分自身の反応の仕方や表

現の仕方、他者に与える影響について考えることの必要性が記述されていた。

No.4では、初めて死が迫った対象に出会い、衝撃と不安のなかで「感情移入し、動揺してしまう自分」に気づいていた。患者の心理について深く考える必要性を実感すると同時に、対象の状況を理解できない理由が、知識が十分でなかったことに気がついていた。ターミナルの対象と関わる看護師に対する尊敬はあるが、具体的対策は記述されていなかった。

No.5では、「相手の状況を十分考えずに発言してしまう自分」に気がついていた。学生が対象から返答に困るような深刻な質問をされ、配慮が足りない返答をしてしまった場面で、不用意な発言をしてしまう傾向にあることを振り返っていた。具体的ではないが解決方法を検討していた。

No.6では、「舞い上がり、優先順位が考えられなくなる自分」に気がついていた。緊張状態が続くと性格的に舞い上がり、知識もあり判断もできていたが、看護の原理原則が守れなかった場面での自己への気付きであった。看護師として十分な行動ができていなかったことを反省しているが、解決方法が記述されていなかった。

No.7では、対象の疾病による心理的問題に対し、「共感だけで健康問題を解決しようとした自分」に気付いていた。しかし、具体的な解決にまで至っていない。

No.8では、「ひとつのことに集中し、他のことが考えられない自分」に気付いていた。具体的解決方法は書かれていなかった。

No.9では、「不安そうな態度をとってしまう自分」が対象に与える影響に気がついていた。看護師として、よくない態度であるため、十分な練習の必要性和、緊張が強い自分なりの解決方法を見出すことを目標にすることが検討されていた。

No.10では、「積極性のない言動をしてしまっている自分」に気がついていた。知識や実技に自信が持てなかったことや対象のニーズがつかめないうちに起こっていることが分析されている。具体的な解決方法までには検討が及んでいない。

No.11では、「対象を理解しようとせず強引だった自分」に気づいていた。ケアの必要性も知識も理解ができており、対象を思っている行動であったが、押し付けになっていることを対象の反応から知った場面を紹介していた。具体的方法の検討はなされていなかった。

基礎看護学実習における学生の思考の分析

表3 リフレクティブサイクルによるRJの分析

| ID | 自己への気づき | 記述・描写および リフレクションの内容 | 感覚 | 評価 | 分 析 | 推 論 | アクション・ プラン |
|----|--------------------------------------|--|-------|--------|---|--------------------------------|----------------------------|
| 1 | 焦りを強く感じるため、ひとつのことに夢中になりすぎる自分 | 身体観察の場面で患者の羞恥心に配慮できなかったこと | 焦り | よくなかった | 焦りと知識が無いために起こったという記述 | 記述なし | 記述なし |
| 2 | 他者の本質的な部分を知ることができなかった自分 | 対象と看護師の間における会話に疑問を感じ、共感の意味を考えた場面 | 不安 | よくなかった | 感覚的な内容の記述 | 患者の気持ちの推察 | 記述なし |
| 3 | 他者を気遣う行動がとれなかった自分 | 対象の不安を増強させる危険性のある言葉をしてしまった場面 | 不安 | よくなかった | 学内演習ではケアの重要性を考えず、安易に実施していたが、臨床の場面では通用しないという記述 | 自分の反応が他者に与える影響について考えた内容が含まれている | 具体的ではない |
| 4 | 感情移入し、動揺してしまう自分 | ターミナル期の対象の不安に感情移入し泣きそうになってしまった場面 | 困惑 | よくなかった | ターミナル期の看護に関心があったが、死に直面した対象と関わる看護師に対する尊敬の思いのみの記述 | 記述なし | 記述なし |
| 5 | 相手の状況を十分考えずに発言してしまう自分 | 質問に対し対象から立場を変わってほしいという発言から安易な発言をしてしまったことに気がついた場面 | 困惑 | よくなかった | 患者の病態などを考慮できていないが、話す言葉や内容、態度に関することや心理についての記述 | 自分の経験から考えている | 具体的ではない |
| 6 | 舞い上がり、優先順位が考えられなくなる自分 | 2つの場面から、焦りから優先順位や原理原則を考慮した実践ができなかった場面 | 焦り | よくなかった | 自分の行為が悪かった理由を知識によって分析しているが、性格的に同じようなことをしてしまう傾向にあることと尊敬する看護師に対する記述 | 記述なし | 状況に応じた具体的な解決策ではない |
| 7 | 共感だけで健康問題を解決しようとした自分 | 対象の身体的な問題に対し、具体的方法ではなく、共感することで解決しようとした場面 | 困惑 | よくなかった | 身体的な問題と心理的な問題の区別がつかないことを記述 | 記述なし | コメントにより記載はあるが具体的ではない |
| 8 | ひとつのことに集中し他のことが考えられない自分 | 行為に対する注意深い配慮ができなかった場面 | 残念さ | よくなかった | 自分の行動に対する傾向についての記述 | 記述なし | 自分の行動に関する対策を記述しているが具体的ではない |
| 9 | 不安そうな態度をとってしまう自分 | 対象を不安にさせる手技をしてしまった場面 | 焦り | よくなかった | 知識の不十分さの実感と、冷静に判断できる看護師に対する尊敬の記述 | 記述なし | 記述なし |
| 10 | 積極性のない言動をしてしまっている自分 | 対象を不安にさせてしまう手技や態度をとったこと | 自信のなさ | よくなかった | 自分の考え方に対する自信が低下している内容の記述 | 教科書の内容を記述している | 記述なし |
| 11 | 対象を理解しようとせず強引だった自分 | 対象の為と思って清潔のケアを勧めたが、結局、断られ続けた場面 | 困惑 | よくなかった | 自分が良いと思うことは対象にも良いと思う自分に対する反省の記述 | 根拠となる知識が明確になっていない | 記述なし |
| 12 | 想定外の状況に焦るため混乱してしまう自分 | 焦りのための確な状況把握と手技、環境を整えることが十分できなかった場面 | 焦り | よくなかった | 冷静な判断をした看護師に対する尊敬の念の記述 | 自分を主体に考えている内容 | 自分を主体にした方法 |
| 13 | 対象の考えや思惑が理解できず、また、自分の考えを伝えることができない自分 | 対象に学生としての関わり(清潔の援助)を理解してもらえなかった場面 | 困惑 | よくなかった | 記録なし | 記述なし | 記述なし |
| 14 | 一方的な発言をしていた自分 | 対象との会話で自分の意志を伝えられず、かみ合わなかった場面 | 困惑 | よくなかった | 価値観が違うことが理解できたという記述 | 状況把握の必要性の理解ができていない | 技術実施のための説明や対応に関する内容のみ |
| 15 | 状況の判断ができていない自分 | 清潔のケアを何度も断られても勧めてしまった場面患者にとっての必要性を考えずつく促した場面 | 困惑 | よくなかった | 対象のニーズや自分本位だったという記述 | コミュニケーションに関する知識の記述が不十分 | 技術実施のための説明や対応に関する内容のみ |
| 16 | 緊張が強く、行動ができなくなってしまう自分 | 清潔のケア時、自分がイメージしていたようにできず、さらに対象を危険にさらした場面 | 焦り | よくなかった | 知識を明確にし、事前の準備が大切であることが理解されたという記述 | 色々な場面を想定した解決策の検討の必要性が記述されている | 具体的内容ではない |
| 17 | 表現することが苦手な自分 | 手袋をしてのケアで対象から汚いものを触らせてと言われ、返事ができなかった場面 | 困惑 | よくなかった | 記述なし | 過去の体験から考えられている | 記述なし |

No.12では、「想定外の状況に焦るため混乱してしまう自分」に気がついていた。判断のために必要な知識の獲得や状況の把握はできるが、想定外の状況のなかで行動する際、混乱してしまい確実にケアが実施できないことが分析されていた。改善方法を検討しているが具体的ではなかった。

No.13では、「対象の考えや思感が理解できず、また、自分の考えを伝えることができない自分」を気づけていた。対象とのやり取りの中で、看護学生の立場をきちんと伝えることができず、上手くコミュニケーションが取れないため悩んでいたが、具体的な方法を明らかにし、実行することが記述されていたが、その後の結果は記述されていなかった。

No.14では、対象と自分の価値観にずれがあることに気がつかずに、「一方的な発言をしていた自分」に気がついていた。これまでの経験と重ね、対象の価値観を理解していた。具体的に解決策が検討されていた。

No.15では、ケアの必要性が理解できているので、対象にケアを押し付けになってしまった場面を紹介し、そのなかで「状況の判断できていない自分」に気づいていた。具体的にどのように判断するのかという解決方法が示されていた。

No.16では、「緊張が強く、行動ができなくなってしまう自分」に気付いていた。対象の前で混乱している姿を見せてしまうなど、いつも自信が持てないという状況が記述されていた。知識の充実を図ることで自信を持つという具体策があった。

No.17では、「表現することが苦手な自分」に気づいていた。十分に考えて対象に伝わるようにしたいが、自分が考えている行動が対象にとって不愉快な表現になってしまうのではないかと思っていた。具体的方法が検討されたが、その後、実施の記述がされていなかった。

IV. 考 察

1. リフレクティブジャーナルの実状とリフレクションにおける<自己への気付き>

結果から、学生がリフレクションする内容は、技術を実施するときの焦り(No.1.6.8.12.16)、対象との会話の中で伝達が上手くいかないこと(No.3.5.9.13.17)、対象の理解ができず強引な態度をとっていたこと(No.7.11.14)など多様であった。それらは、他者と

の関係のなかで自分が他者にどのように影響しているのかを初めて考える経験であったと考える。藤岡らは、看護教育の全体を通して学んでほしいのは「臨床知」であると述べており、臨床知について中村の定義を引用し、「環境や世界が我々に示すものを読み取り意味づける方向で成り立っているような『知』である」と説明している¹⁴⁾。学生の実習での経験は、対象との関係や臨床場面に対し、学生なりの意味づけを行う機会でもある。そのような経験に対する意味づけを行うためには、学生の振り返り(内省する)が必要であると考えられる。リフレクションの<自己への気付き>は、正に自己を知ることである。しかし、学生の記録を分析すると、<自己への気付き>が不明確であること(No.10.15)や、<分析>が十分に行っていないこと(No.2.4.5.7.8.9.10.11.13.14.17)が多かった。これまでの学生の生活経験の少なさも関係し、内省には至っていないのではないかと考える。

リフレクションとクリティカルシンキングとの関連性は、リフレクションがクリティカルシンキング能力を高める¹⁵⁾すなわち、自己の振り返りがクリティカルシンキングのスキルでもあるのである。そのため、リフレクションやリフレクティブジャーナルの継続によって、自立的に能動的に考える能力と、建設的に積極的に思考する¹⁶⁾能力を身につけることができるのではないかと考える。そのため、RJでの質問内容は、学生に対し、自己の気付きができる内容であり、思考過程が明らかになることから、実習記録としては効果的であったと考える。

今回、<自己への気付き>が示されていない記録があり、感情や考えを記述することを拒否している可能性もあると考えるが、学生によっては、自分の考えていることや感情などを表現することが苦手であることや、他者に伝えられるような記述ができていないのではないかと考えられた。そのため、記録として表現することについても指導が必要であることが示唆された。

2. 看護専門職者としてのアイデンティティとリフレクション

職業的アイデンティティを形成する概念には「基礎教育での経験」、「自我同一性形成」、「価値観の統合」などがある¹⁷⁾と説明されている。学生の実習による体験は「基礎教育での経験」であり、学生自身の発達段階も含め、職業的「自我同一性形成」の初歩的な段階であると考えられる。指導者や教員の発言や行為を

看護職のモデルとし判断している中で「自己への気付き」(No.2.4.6.9.12)があった。例えば、No.9は対象に対し不安を抱かせるような看護師としてよくない行動をとった自分に気がつき、看護専門職を意識している自分にも気づいていた。実習による経験を通して自己と看護専門職としての自己の統合がなされているのではないかと考える。よって、リフレクションを行うことが、看護専門職者としてのアイデンティティの形成にも影響すると考えられた。

V. 本研究の限界と今後の課題

学生の記録確認やコメント記載が実習中に行われるため、十分な時間をかけて応答を繰り返すことができなかった。特に、「自己への気付き」のスキルを用いた後の学生に対する介入が必要であった。また、記述が不十分なため「自己への気付き」があった学生の本意を汲むことができず、コメントが有効ではなかったRJがあったのではないかと考えられる。生活経験が少なくなっていると言われる学生たちにとって、見過ごしてしまうような状況の中にも、指導教員の関わりが大きく影響すると思われる。そのため、臨地実習における発問やコメントについても考慮して必要があると考えられる。

謝 辞

本研究において、リフレクションについての専門的知識およびリフレクティブジャーナルの提供を賜りました、神戸大学医学部保健学科教授 田村由美先生に深謝いたします。

<引用文献>

- 1) 金子道子, 石井八恵子: 看護学臨地実習ガイダンス1—看護学理論のまとめと実践—. 医学芸術社, 東京, p.8, 1998
- 2) 西南女学院大学2005年度 Syllabus 基礎看護学実習, p.88
- 3) 宮脇美保子ら: 4年制大学における看護学生の職業的
社会化 2年生を対象として(第2報). 医療看護研究, 3巻1号, pp.64-68, 2007

- 4) Sarah Burns, Chris Bulman, 田村由美, 中田康夫, 津田紀子監訳: Reflective Practice in Nursing The Growth of the Professional. 看護における反省的実践—専門的プラクティショナーの成長—. ゆみる出版, 東京, p.1, 2005
- 5) 中田康夫ら: 「自己への気付き」のスキルを活用してリフレクティブジャーナルを記述した学生の変化. Quality Nursing, Vol.10 no.5 pp.61-66, 2004
- 6) D Schön著, 佐藤学, 秋田喜代美訳: The Reflective Practitioner, 専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える. ゆみる出版, 東京, p.2, 2001
- 7) 田村由美ら: リフレクションを行うために必要なスキル開発—オックスフォード・ブルックス大学における教授方法実践例—. Quality Nursing, Vol.8 no.5 pp.51-57, 2002
- 8) 前掲書4) p.26
- 9) S. Atkins, K Murphy: Reflection; a review of the literature. Journal of Advanced Nursing, 18: pp.1188-1192, 1993
- 10) 前掲書6) p.53
- 11) 前掲書4) p.49
- 12) 前掲書4) pp.51-52
- 13) 前掲書4) p.55
- 14) 藤岡完治, 野村明美: わかる授業をつくる看護教育技法 3 シュミレーション・体験学習. 医学書院, 東京, p.6, 2000
- 15) 津田紀子, 前田ひとみ: リフレクションのエビデンス; クリティカルシンキング能力の育成. 臨牀看護, 32巻12号, pp.1693-1702, 2006
- 16) 小田正枝編著: 看護過程がよくわかる本 看護理論を
実践に活かす. 照林社, 東京, pp.9-11, 2002
- 17) グレック美鈴: 看護師の職業的アイデンティティに
関する中範囲理論の構築. 看護研究, Vol.35 No3, pp.2-9, 2002

<補注>

- 注1) 本学科は、2006年度から新カリキュラムを導入し、基礎看護学は基礎看護活動論と名称を変更している。
- 注2) リフレクティブジャーナルを作成した田村は、Gibbsに師事をうけ国内でのリフレクションについての研究も多い。(田村由美ら: リフレクションを行うために必要なスキル開発—オックスフォード・ブルックス大学における教授方法実践例—. Quality Nursing, Vol.8

no.5 pp51-57, 2002など)

注3) ドナルド・ショーンは、デューイの反省的思考を専門家の実践の中核に定位し、「The Reflective Practitioner : How Professionals Think in Action」で「反省的実践家」について説明した。日本でも翻訳され出版されている（佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える』）。

Research on Thoughts of Nurse's from Basic Nursing Training Using Reflective Cycles

Takako Ando, Natsuka Furusho, Yuri Hara
Kazuko Aoyama, Keiko Kubota, Masae Oda

<Abstract>

From our experiment, we have found how students look back upon themselves using records formed by the concept of reflection. As a result, many of them found themselves "unable to grasp the situation" or "speak without understanding the situation of others." We think this is an important process for students to build the perspectives of nurses. We also found that a reflective journal can be used as a record, and students were able to look back upon themselves from writing their experiences of training. Because that is a skill of critical thinking, reflective journals can be used as records.

Key words: basic science of nursing training , nursing practitioner , reflection , critical thinking , reflective cycle